

折々の銘 6

【富士】ふじ その1

富士山は美しい山です。

高い・尊い・神々しい・めでたい・様々に誉め讃えられてきた山です。

日本人が富士山をいかに評価してきたか、その経緯を少し紐解いてみたいと思います。

地学上、富士山が如何なる過程で形成していったのか詳しく知りませんが、有史に入ってもなお活火山であり、噴火は江戸時代まで続いたことは承知しています。

記録に残る噴火の中でも貞観六年(864)の噴火は大規模で、現代の富士五湖、青木ヶ原の原形はこのとき形成したようです。

その後も噴火を繰り返し、江戸時代宝永四年(1707)の噴火により中腹に宝永山ができたのでした。現代の富士山はおとなしい様相ですが、江戸期以前の人々にとっては噴煙を湛え、時には火も吐く力強い山であったといえましょう。

富士山はすでに『万葉集』に詠まれています。

・我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ
というように富士の噴煙火を恋心に喩えている例が数首みられます。

次代の『古今和歌集』仮名序にも「富士の煙によそへて人を恋ひ」とあるのはまさにこの系列の歌を意味します。

また、『万葉集』には情景歌としても富士が詠まれ、特に赤人の長歌はよく知られているところ
です。

・天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる布士の高嶺を 天の原振りさけ見れば 渡る日の影もかくらひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくそ雪は降りける 語り継ぎ言ひ継ぎいかむ 不尽の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ うち出してみれば真白にそ 不尽の高嶺に雪は降りける

日本の情景歌の原点といえるこの歌は堂々とした富士の姿を見事に詠んでいます。

煙火ではなく雪に関心を持った万葉歌はこの他にも、

・富士の嶺に降りおく雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり
があります。

さて、平安人の眼には富士山をどう映っていたのでしょうか。

『伊勢物語』東下りの段に、心細く東国に下る業平らしき一行が富士山の印象を綴った興味深い文があります。

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。 『伊勢物語』 九より

5月下旬でも季節を問わぬ雪がある・比叡山を二十重ねた高さ・塩尻のような形をしていると描写されているのです。

高さの比較基準として都人が比叡山を出すのは当然でしょう。都を囲む連山の中で一際高く堂々と見えるのが東北に位置する比叡の山なのです。

私はこの二十という数字が気になって仕方ありません。実測的数値(富士山=3,776m、比叡山=848m)ではなく感覚的数値ですから「十ばかり重ね…」という表現で充分と思うのですが…。これは単に高さの比較に止まらず量感をも含めて二十という数値で表したのではないかと思っています。

日本最古の物語である『竹取物語』にも富士山は登場します。

月に帰ってしまったかぐや姫を思い、帝は姫の残した不死の薬と手紙を富士山頂で燃やしてしまうのでした。帝も竹取の翁も、かぐや姫のいない世に不死の薬など何の役にたとうかというのです。この物語での富士山は「天に最も近い山」と評されています。

大勢の士(つわもの)どもを山に差し向けたので士が富む山、富士山と名づけられ、不死の薬の燃える煙は未だに雲中に立ちのぼるとというのがこの物語の結びです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~